

### 3 . 生き方の多様化に伴う死に方の多様化

佐藤 茜

#### ( 1 ) 問題意識

私がこのテーマで調査を始めたきっかけには以下に述べる二つの出発点がある。

一つは、「人が死んだらその後はどうなるのだろう」という誰もが一度は考えたことがあるだろう、単純なことからである。この問いに対して、「焼かれて、灰と骨になり、墓に入れられて終わり」と簡単に答えてしまっているのだろうか。それではなぜ人々が、高いお金を払って葬式をし、生きていくための土地を切り開いて墓地にし、そこに多くの購入者が現れるのか説明がつかない。様々なことが科学的に証明された現在でも、今は存在しない死者のために家(墓)をつくり、仏壇を拝む。生きていく人々にとって死者、すなわち死ぬこととはどうやら特別なことのようにである。それなのに生きている間に葬式の話をしたり、墓の話をするのは長い間縁起が悪いとタブー視されてきた面も少なからずあるのではないだろうか。自分が死んだ後のことを考え、生前に用意をし、その通りに事を進めるのは可能なのだろうか。

二つ目は、「墓はいったい誰のためのものだろう」ということである。死んだ人の灰と骨が入れられているのだから当然死んだ人のためのものであるはずだが、それをつくるのは生きている人で、盆、正月とそこに足を運ぶのは今生きている人たちである。そして生きている人達はいずれ私もここに入るのだろうかと考える。墓石には 家の墓と記され、日本では長い間「家」を表す象徴として墓があった。一家の主が墓を守り、家の継承者である長男が墓も継承していく。娘しかない家では婿養子を取り家の継続をはかった。しかし、近年晩婚化、未婚化、少子化が進み、家族の形は急速なスピードで変化していつている。今時長男、長女の結婚でそこまでもめることもないだろう。そのような生き方の多様化に墓はどのように対応しているのだろうか。様々な生き方を選ぶ人たちが様々な死に方を選ぶこともできるのだろうか。そして、墓を死んだ後の自分のためのものにするのは可能なのだろうか。

このような漠然とした出発点から始まり、最近の墓事情を調べていくと、あるお墓の名前を何度も目にすることになった。京都常寂光寺にある『志縁廟』である。ここでは永代供養という合祀方法がとられ、墓が長い間とってきた血縁という枠組みから、志縁という枠組みへの変換が行われている。戦争独身者と呼ばれる独身を余儀なくされた女性達がつくった「女の碑の会」の活動の目的として建てられた墓であるため、女は嫁に行き、子供を産んで家を継続させるのが仕事だといわれた時代から一人で家をつくり生きてきた、生き方の多様化の先駆的存在が行った、死に方の多様化の始まりでもあるといえるだろう。この『志縁廟』を具体的事例にし、墓はなぜ必要になったのか、最近の墓事情はどのようなものなのかを通して、死に方の多様化について考えてみたい。

## (2) 墓

### ア．墓の歴史

文献『お墓がないと死ねませんか』(参考文献 1)などを使い、墓の歴史について述べてみる。

もともと庶民が墓をつくる習俗は、日本古来のものではない。古代から中世に至るまで庶民は遺体を山、森、林、野、海、島などに捨てていた。まして、マキをたくさん使う火葬は、庶民にはまったく縁がなかった。火葬は、風葬、鳥葬、水葬、土葬とならんで、世界で古くから行われてきた遺体処理法の一つだが、仏教と結びついてインドで発達、中国でも後漢時代に受け入れられ、新羅を経て日本に伝わった。

火葬は壮大な古墳をつくっていた大和王朝の天皇や貴族らの間に、一種の文化革命をもたらした。日本で最初に火葬したといわれているのが僧の道昭で、700(文武天皇四)年である。その後三年して、持統天皇が、続いて文武、元明、元正の各天皇が相次いで火葬をした。この時代、ぜいたくな葬儀をいましめる薄葬令がしばしば出された。上層階級の中に浸透した仏教の影響力の大きさを示すこの薄葬令の一つに、一定の官位や財産があって、墓をつくる資格があるものでも、散骨を望み、墓が嫌ならつくらなくてもよいという意味の文章が書かれている。

庶民は、初めにふれたように、山や海に遺体を還していた。死体がみじめな姿に変わっていくのを見てきた庶民のなかに、死体は恐ろしいもの、忌むべきものとする観念が育つのは自然であり、遺体は魂の抜け殻との考えから身辺から早く遺体を遠ざけたい、というのが庶民の気持ちだった。

平安時代から鎌倉時代にかけて、土まんじゅうや、石を積み上げた上に卒塔婆や五輪塔、板碑、自然石などを立てた墓が見られるようになるが、こうした墓も、今の詣でる墓とは違って、遺体の捨て場所にすぎなかった。それは上層階級も同じである。

恐ろしいものとして捨てられていた遺体が、祀るものへと変わっていったのは、平安末の十一世紀からで、卒塔婆や五輪塔もまた鎮魂・魔よけから、埋葬地の標識に変化した。こうした時代の過渡期に、新旧の観念を共存させていたのが両墓制度である。遺体を埋葬する墓は埋め墓、捨て墓などといわれ、墓石や墓標は立てず、村はずれの共有地などにあった。それに対しお詣りする墓は詣り墓、祀り墓などといわれ、寺の敷地など住んでいる場所に近いところに作り墓標を立てる。普段は詣り墓に行くのみで埋め墓には行かない。これは死んだ靈魂は詣り墓にまつり祭祀の対象とし、遺体は靈魂から分離したものとして考えているところからくる。もともと埋葬に墓石を必要としない つまり墓石をともなう墓を必要としない で遺体を遺棄する習慣があったところに、仏教が行う死者供養 遺体に対する供養 の考えと混合してできた形態といわれる。埋め墓にも墓標を立てることでふたつの墓標を持つところも出て、このような墓制は全国的に希薄になっているが現在でも見られる墓の形態である。

平安末期から鎌倉時代にかけて、支配層と僧侶の癒着が始まり、寺と墓地の一体化がみ

られるようになった。僧侶の中には、信仰そっちのけで、死後の葬祭に力を入れる者もあらわれた。

庶民が墓をつくるようになったのは、江戸時代の中期以降、キリシタン禁圧をねらった徳川幕府の檀家制度が普及するようになってからのことである。百姓、町人一人残らず、どこかの寺の檀家になるよう強制され、宗門人別帳に名を記載され、勝手に宗旨を変えることは禁じられた。檀家制度は、キリシタン対策を超えて、民衆管理の強力なテコとなり、それはまた、庶民の葬儀と死後供養を累代にわたって檀那寺にゆだねることであったから、墓をつくって祀る先祖供養が、仏式で全国に普及するきっかけになった。寺院側もお布施をとるため、手厚く葬ることが死者への供養であり、先祖の法要を欠かすとたたきがある、などと説いて、庶民を墓にしばりつけ、葬儀をさかんにした。庶民は、遺骸は昇天する靈魂の抜け殻と思っていたのに、遺骸がはいった墓を拝まないと成仏できないといわれ、混乱したが、時とともに、遺骨を大事にしないと死者が浮かばれないという俗信が広がり、定着していった。幕府と仏教の癒着に強く反発したのが、儒教と神道で、特に儒学者達は、仏教への反感を火葬否定論で表した。こうした火葬批判に押されて、仏教諸宗派は、浄土真宗を除いて土葬採用に傾いていった。

明治政府は、幕府を支えていた仏教にかえて、神道の国教化をはかることで、天皇制国家の確立をめざした。1868(明治元)年の神仏分離令で、神社は寺院から独立し、神社の「氏子調べ」の法令を1871(明治四)年施行することで檀家制度の肩代わりをねらったが、強い反発にあって二年後に廃止した。1872(明治五)年には「凡そ葬儀は、神官、僧侶にあらざれば執行を許さず」との布告が出て、神葬は仏葬とならぶ存在になった。しかし、キリスト教などの葬儀は禁止され、異教の導師による葬儀を強制されることになった。また、神官、僧侶に依頼しない葬儀、つまり自葬も禁止された。1873(明治六)年には、火葬禁止の太政官布告が出た。突然の火葬禁止は、都市部で大混乱を招いた。土葬のための棺を受け入れる余地が寺院にはない。東京をはじめ大都市から、このままでは近いうちに町中が墓地で埋まってしまう、と強い反対の声が出て、火葬禁止令はわずか二年足らずで廃止された。火葬再開後は、都市部では土地をくいつぶす土葬が逆に禁止された。1897(明治三十)年の伝染病予防法は、火葬の普及を加速した。

明治政府は、天皇制国家の核として「家」制度の強化につとめ、日本の国を大きな家に見立て、その家長が現人神の天皇であるとした。その下に「家族国家」の一員としての万民が身分、財産の違いによって仕える階層秩序を形成する。万民は長男を戸主とする「家」をつくり、戸主が家長として家族をおさめる、というタテの仕組みである。1890(明治二十三)年発布の教育勅語は「忠君愛国」とともに「家族意識」「祖先崇拜」を、義務教育の段階から庶民のなかに植え付けた。その精神的地ならしをバックに、「家の祭祀」の対象としての墓という観念を正面から打ち出したのが、1898(明治三十一)年の明治民法の施行である。この頃から、庶民の間で系譜、祭具、墳墓など、それまで無縁だったものを競って作り始めた。一つの墓に何人もが入る「家の墓」が一般化するようになった。その間の墓地、埋葬な

どについての行政を集約したのが、1884(明治十七)年の「墓地及埋葬取締規則」で、この規則によって、墓地以外に遺体、遺骨を埋葬、埋蔵するのを禁じた。明治政府は、死んだ人は「家の墓」に祀って敬うという定式を庶民に押しつけることで葬法まで国家管理のもとに置いた。明治時代まで、地方には多様な葬法がまだ残っていたが、次第に画一化されていた。

そして、この明治の葬法の規則をうけて、1948(昭和二十三)年、現在でもほぼ同じ形をとる「墓地、埋葬等に関する法律」〔資料1〕が公布され、墓地の設置や運営、埋葬に関する規則が明文化されている。遺体の扱いは公衆衛生と信仰的側面が絡む問題で、法律的に規制を明文化する必要があったのである。よく畑の真ん中にお墓があったりするが、それはかつてここで埋葬していた名残である。現在も祀っている家も多いが、現在の墓埋法では都道府県知事の許可なく畑などに墓地を新規につくることはできない。また、「墓地を買う」とは、不動産物件として土地を買うのではなくて、墓地として使う権利を買うという意味である。

以上が『お墓がないと死ねませんか』(参考文献1)によって見た墓の歴史の概略である。

#### イ．歴史からわかること

こうしてお墓の歴史をみていくと、お墓は死んだ人のためだけのものではないということがはっきりとわかってくる。国の政策のため、お寺のため、そして家のために墓は「必要」になったようである。国の指導者が変わるたびに人々の死者に対する意識は移行を余儀なくされ、そしてそれに縛られてきた。生きている間拘束するものによって、死んでもなお拘束されているのである。これは昔だけの話ではない。多様な生き方がある今も、墓に関する法律は明治期のものをもとにしたものであるし、1948年施行後五十年以上を経た現在まで大きな改正が行われることなく現在に至っている。そして今でも墓の基本は家を中心としたものである。

墓に入ることで土に還るといふ言い方をするが、現在のコンクリートでできた墓でどうやって土に還ることができるのだろうか。庶民の生活水準が上がったことにより出てきたとも言える墓だが、有名人や、金持ちのつくったばかりでかい墓を見ると、墓は生前の財産や家の大きさを誇示するためのものではないかと思えることもある。また、墓の承継者がおらず、無縁になることが予想されるために、安心して墓をつくることもできない人たちもいる。昔だけではなく、現在も死者は生きている者のために肩身の狭い思いをしているのではないだろうか。それにより人々は死を恐れ、死ぬことについて考えることもおろそかにしてきたのではないだろうか。ここで重大な問題が浮かびあがる。家を中心とした墓の時代は、自分が死ねば遺族が面倒を見、墓を代々守ってきた。考えなくとも自動的に墓に入るシステムが確立していたのである。しかし今では独身を貫きひとり生きる人もいる、結婚しても子供をもうけない夫婦もいる、旦那の家族の墓に入ることを拒む女性もいる。このような生き方をする人たちは、自分の死後を嫌でも考えざるをえない。墓地による深

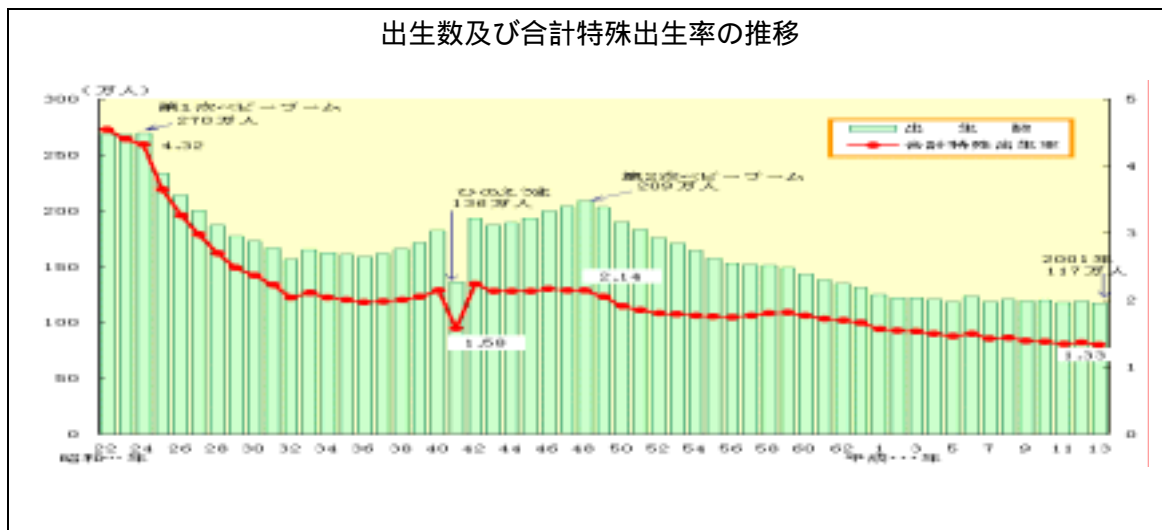
刻な環境破壊と、地価上昇とともに土地不足のための墓地の高騰と不足、それにも関わらず核家族化が進む世の中では各家で墓を求める、このような社会事情を背景に、様々な生き方の自由に遅れて、葬送の自由は発展をみせているようである。

### (3) 最近の墓地事情

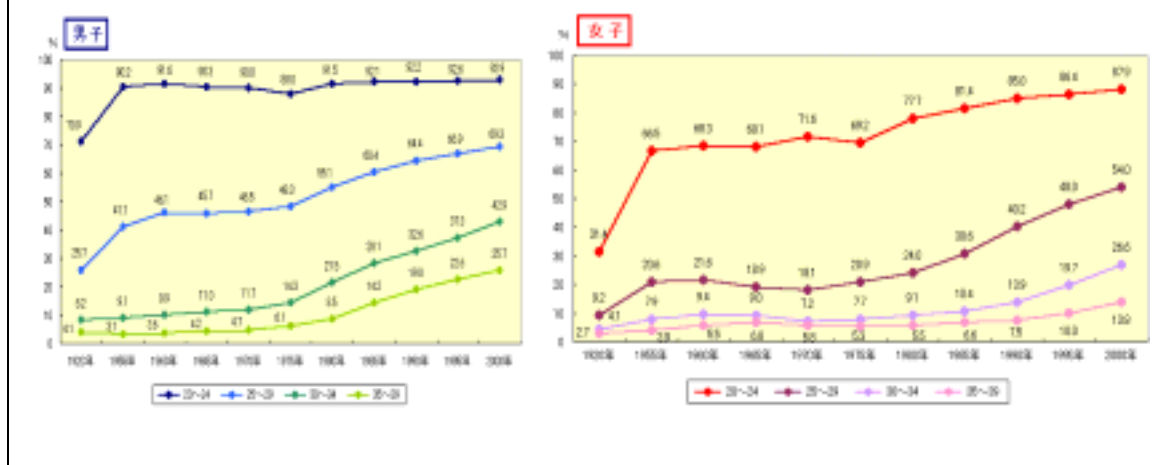
#### ア．新しい家族の形

1980年代以降、従来の枠組みに入らない家族の形態がしだいに増え始め、「家族のゆらぎの時代」ともいわれるようになった。具体的には、核家族がさらに核分裂を起こしてシングルが増加したり、離婚率の上昇、晩婚化、子供を持たない夫婦の増加、少子化などが考えられる。以下の〔図表 1〕からも分かる通り、女性一人が一生の間に生む子供の数は平成11年には平均1.33人となり、昭和40年代には一年間に生まれてくる子供の数が200万いたのに対し、最近ではその約半分になっている。その数は下降の一途をたどっている。また、晩婚化も確実にすすんでいる。2000年には20代で結婚しない女性は五割を超えている。女性の結婚が遅くなることは、子供を産むことのできる期間が短くなることを意味し、今後子供が減ることも意味する。男性では30代でも結婚しない人が五割に達する勢いで、子供は結婚した夫婦の間でつくるものとまだまだ考えられている日本では、このような晩婚化、未婚化は、より子供の数を減らすだろう。

〔図表-佐藤-1〕



年齢別未婚率の推移



〔図表-佐藤-2〕

〔図表-佐藤-1,2〕共に「少子化情報ホームページ」より引用 <http://www.l.ipss.go.jp/>

### イ．墓への意識の変化

核家族化にともない現在でも 家之墓という家墓が一般的な日本の墓も変わりつつある。このような家族の変化を墓からみれば、「承継者のいない人」の増加を意味するのである。

これまでの墓石といえば、和型・洋型の別はあるにせよ、ほとんどが同じような形のものだった。しかし最近、故人の生前の趣味や愛好物をかたどった特徴のある個性的な墓を目にするようになった。これは墓への意識が、家の墓という概念から個人の墓へと変化しつつあることを示す事例になるのではないだろうか。またこのような個性的な墓ができた背景には、人々の意識の変化に加え、墓園や墓石業者側の意識の変化もみることができる。人々の希望に添った墓石をつくるため、墓石業者がデザイン部門を開設したり、コンサルタント業務を開始するところも出てきたからである。1987年には業界で初めての本格的なお墓の「ニューデザイン発表会」を石材店約300店のボランタリーチェーン「全優石」が開いている。

従来の家墓は代々承継者を決め、その人が管理料を払って、永続的に使用していく「永続システム」をとっていく。しかし家族が変化し不連続化しているにも関わらず、依然として墓への「連続性」が求められる。お墓を買うには、墓地の一区画に永代使用料を払って墓石や石の囲いをつくり、管理費を払う。ところが死後墓の世話をする後継ぎのいない単身者や、子供のいない夫婦達は寺院や民営霊園から「無縁になるとわかっている人にはお譲りできません」と、墓地から拒絶されていた。無縁になると、管理費は入らず、墓石などは国有財産になってしまう。また無縁になったお墓を整理して、新しい墓地をつくるには、墓石移転改葬広告を何度も新聞に載せなければならず手間、暇、金がかかるのだ。管理費などいらないと、無縁墓のまま放ってあるところも多く、墓地不足に拍車をかけている。この

ような家族の「不連続」への対策として、期限を切って使用する「有期限制」がすでに行われている。墓の形は従来と全く変わらず、30年ごとに承継者の有無が確認される方法で、承継者が誰もいなくなれば、遺骨は霊園の「合祀墓」に納骨され、空いた墓所は再利用される。

また、霊園から敬遠された人たちは、仲間同士で共同の墓や納骨堂をつくったり、あるいは寺院が用意した共同の墓などを予約した。このような「承継者を必要としない墓」(永代供養墓)は、1980年代以降年々増加している。それらの多くは合祀墓・集合墓といった省スペースの形をとり、固有スペースに関しては有期限制をとっているところもある。さらに墓に入る人も、夫婦、自分ひとり、仲間、自分の両親といったように選べて、血縁や家族にこだわらず入ることが可能などところがある。このような承継を必要としない合葬式の墓は多様化した生き方が市民権を得た時代にふさわしい墓として考えられている。

墓を持たないスタイルもある。山や海などに遺骨をまく「自然葬」に加え、ロケットを使って遺灰を衛星軌道に打ち上げ、宇宙へ旅立たせる「宇宙葬」を手掛けるビジネスも現れている。さらには、「サイバーストーン」(電腦墓)なるものも現れた。「電腦墓」とは、遺骨は灰にして自然の生態系の中に返し、お墓の持つメモリー機能については、最新のコンピューター技術を駆使して、インターネット上に刻み込み、現行のお墓をなくしていこうとする試みである。

墓の新しい方向性は、それを使用する生きている人々の意識の転換から決まってきたといってもいいのではないだろうか。東京都が1995(平成七)年実施した「都市型墓地に関する意識調査」〔資料2〕からそれらが伺える。「誰と埋葬されたいか」という問いでは、「配偶者」が45%と最も多く、ついで「家族」44%、「子供」25%と、これまでの先祖代々の墓ではなく、世帯単位の埋葬を希望するものが多いといえる。また、子供を束縛しない、あてにしないと考えている人も多くなっていることがわかる。さらに「合葬式の墓地について」は、約90%支持があり、「散骨」についても容認が46%にのぼっている。新しい墓の形は人々に受け入れられているといってもいいだろう。深刻な墓地不足に、人々の新しい墓への意識が加わり、これからもまた違った墓の形が生まれるだろう。

#### (4) 永代供養墓

生きている間、ひとりで生涯を過ごそうとも、子供をもうけなくとも、徐々に気にされない時代になってきている。しかしそのような人が必ずぶち当たるのが死んだ後の問題である。もう40代になる、未婚を突き進む私の親戚は、仕事を持ち、ひとりで悠々自適に暮らしている。しかし最近「墓はどうしよう」ともらしているのである。まだ40代なのにもう墓のことを考えていることに驚きを感じた。それほど死後のことは後に残す家族がいない者にとって、気になることなのだろう。このような人達が安い値段で、後のことを誰にも迷惑をかけず入れるのが永代供養墓である。寺院がある限り死後の供養をしてくれて、一度永代供養料を納めれば、使用料・管理料・お布施・寄付金など一切費用がかからない。また宗教・宗旨・宗派が問われることもなく、檀家入檀は不要である。申し込みは国内在住者で

あれば誰でも、国籍も不問である。このような永代供養墓は1987年以降の設置が大部分で、現在では全国に140基以上にもなる。「私がいいるお墓が無縁になるかも知れない」という不安から希望者は相次ぎ、永代供養墓は、永代供養という言葉によって「無縁」の呪縛から人々を解放する装置となったのである。

しかし、永代供養墓の「永代」には実態がない。寺院は安心の装置としてどのようなものを与えているのか明らかにしていないのである。これまでの檀家の墓が、使用者側に「永代」使用权があったのに対し、この永代供養墓の「永代」とはお寺が続く限り「永代」にわたって供養するという意味である。家の承継が困難な時代にあつて、血族で承継されることの多い寺院の永続性も保証されてはいない。また、霊園の経営者、寺院の住職の交代によってその方法が承継される保証もどこにもない。そうなれば「永代供養墓」そのものの無縁化ということになってしまう。

また、永代供養墓に大切なことは「無縁」の呪縛から解き放つ「安心の装置」になり得るかである。家族に代わる新しい共同体とその連帯感が必要なのである。話題になったのはここ十年だが、共同墓の伝統は日本社会に早くから総墓という形で受け入れられてきた。その共同性のあり方も多様で、親族・ムラ・寺院が檀家のためにつくったものもある。一度共同の墳墓が建立されると、その合葬された共同墓に人々は特別な意味を込めてきた。金持ちも貧乏人も同じ墓に入るのだから「死んだら(仏の前では)平等」といったり、「死後の住処」であることを確認して、ムラの連帯感が生まれることもあったようだ。墓はムラの統合のシンボルの役割をし、このムラの存続があるかぎり私は無縁になることがない、と墓が安心の装置となったのである。

それでは近年大変重宝され、増加し続ける永代供養墓の場合はどうか。ここでは1990年に建立された『志縁廟』を例にとり、寺院の永続性はどうか、共同体の形成はどうか、「永代」という安心の装置はどのように与えられているのかについて具体的に見ていきたいと思う。

## ア．事例

### a．常寂光寺住職へのインタビュー

このインタビューが実現するまでにはどのようなことがあつたのかまず述べなければならない。インターネットで検索し、常寂光寺の電話番号、女の碑の会の電話番号はすぐわかつた。しかしそれから、女の碑の会の方には何度電話をしても誰もでない、寺の方は住職と副住職が忙しく不在で、なかなか話しをすることができない。これでは先に進まないと思い、双方に手紙を出した。碑の会の代表の方から学校に電話をいただき、女の碑の会は今事務局をすべて寺の方に移していることを、また代表の谷さんはご病気で入院されていることを知った。寺の方からかかって来た電話では副住職がインタビューに答えてくださって、谷さんへの手紙は寺の方に送られており、碑の会の会員の方も紹介するとのことだった。しかし寺へ行く少し前の日に電話すると副住職は月末まで帰って来ないから住職

が受け答えをするとのこと。そして会員の方の電話番号と住所を教えていただいた。教えていただいた電話番号にかけると違う人がでる、104 で名前と住所をいったがその住所に電話の届出はないという。事実は転居したか、電話を携帯にしたのか、未だにわかっていないが、ひとりで生きるとはこういうことなのだ、となぜか痛感した。縁起でもないことだが、私は亡くなったのかもしれないとも考えてしまった。あちらからアクセスがなければどうにも連絡がつけられないことを実感した瞬間だったのだ。また、女の碑の会の会員の方が年を重ね、会ができてからの年月を感じた。本当は寺と会員の方の両方のインタビューをとれば一番よかったのだが、このようなことがあり、インタビューは、常寂光寺の住職にお願いすることになった。また、内容の確認をお願いしたところ、新たな資料と詳しい数字を教えてくださいましたので、加えて記載しておく。

2003(平成十五年)年三月八日・京都常寂光寺にて

・常寂光寺について

Q:年間の拝観者数

A:今ものすごく増えている。詳しい数はわからないが、年間にすると20万人を超える。特に秋の紅葉を求めての観光客は多い。行列をつくる。

またそこからの収益は何千万円にのぼる。

寺の修復をしたり、経営をしていくにあたって、この観光客からのお金は寺を支えていくうえで欠かせない。

Q:現在の檀家数 またその数の推移

A:もともと檀家をつくらないお寺だったが、岡山から引っ張ってきた船頭衆の面倒をみなくてはならなかった。角倉の屋敷の回りに住む船頭衆や船大工を先祖にしたのが今の檀家にあたる。

戦前保津川の船頭衆、船大工を中心とした70~80件の檀家だったが、今はそれが分家となり、現在は150件ほど。

小笠原家の先祖の遺灰が納められているので菩提寺となり、扶持米年30石。たいしたことではないが隠居処だったので小僧さんを養う程度にはなんとかやっていた。

明治になって藩がなくなり、それが途絶えるとやっていたいけなくなっている。

明治以降は6,7年でみんなやめていっている。

42世の時は寺が荒れきって、多宝塔もつぶれかけていた。

そのとき父親は若い時で、町の中の小さな寺に住みながら本国寺で執事長をしていた。

ところが本山の隠居所であるこの寺がつぶれかけて42世の代でなり手がなく、しょうがなく引き受けた。

昭和5年、日蓮さんの650年遠忌があってなんとかそれまでに本堂の屋根を葺きかえしたりを全部借金で行った。きれいにすれば観光客が来てくれる、そうなればなんとかこの寺も持ち直さずだろうとの考えだった。

しかし戦争が始まった。はじめのうちは講演会をしたり、蹴鞠をしたりと観光客をよぼうとしたが、戦争のために観光客は来なかった。

戦争の末期、父親が心筋梗塞で倒れて死んでしまった。

兄が今度は継いだ。ところが兄も結核で死んでしまい、誰も継ぐものがいなくなってしまった。

寺の修理なんかをやっていた父親の功績を檀家が認めて、母親を一人抱えて寺の坊主だから住む家がない、しかも戦争の末期。だから父のお弟子さんの一人を代務住職にして母親とここにおいてもらった。

大学を出て住職になったが、それでは食っていけなかった。

はじめは大阪市立大学で助手をしていたが、大阪市に新設された児童相談所で働き始めた。

市大に四年間、児童相談所に十六年、大阪市に約 20 年いた。

その間は日曜坊主。土曜日も半日、葬式でもできたら休んで。

あそこ公務員は他に職業を持ってはいけなかった。ところが寺だけは食えんやつがいっぱいいいたから認められていた。

20 年経って、大阪の万博以降、日本人が旅行しだして、観光客も来始めたから早くやめてお寺に帰って来て改修にかかるようにと言われた。

私としては檀家への恩義があったので早速大阪市を退職、寺に戻り、近くの花園大学に勤務した。

お寺の一番でっとりばやい金の算段は墓地を売ること。

常寂光寺でもお墓を立てることのできる土地が残っていたが、その土地に志縁廟を建てた。

だから寺の墓地は少なくこれから檀家が増えていくということはないだろう。

Q:檀家との付き合いで昔と変わってきていることは 最近の兆候

A:観光客の中には東京の人でも、ここなら喜んでお墓参りに来てもらえるからとお墓を立てたいとの申し込みがあるが、そのようなものは断っている。

今までの檀家との間で変わったことは特にない。

Q:働いている方の人数は

A:お坊さんは住職と福住職の二人。

受付など常時おられる方が季節や日によって違うが五、六人。人数はたくさんいるが毎日いるわけではない。いれかわり。秋はもっと働く人も増える。

その他植木屋など、その人件費は年間 3000 万円以上。

Q:檀家の墓について 檀家の墓が無縁になった場合の対応

A:法律で決まっているとおり。

無縁の墓碑を撤去、新墓地とするためには、昔は全国紙、地方紙に広告を出して三ヶ月待たなければならなかったのが、今は法律が変わって簡単になっている。

無縁になった場所にはまた新しいお墓を受け付ける。

Q:住職の継承について

A:日蓮宗は真宗のように血縁相続とは決まっていない。

ただこの頃坊さんになりたいという人はあまり多くない。

だから血縁で相続する形になってしまう。

それとほんとはおかしいと思うが、寺の建物その他を維持管理するには血縁のほうが有利だということはわかる。

僕だって一生懸命建てたのは父親の思い出があるからだ。

昔のインドを見れば、お墓の世話なんかしなかった。日本に合うように変わったのだろう。

Q:月に何度くらいの法要があるか また法要以外の活動

A:例えばこの冬はよく死んだ。たまってる老人が、90代の。ただ月によって違う。

この冬も、今も、その後々の始末で忙しい。四十九日だとか納骨だとかで。今日も昼からある。

法要以外には、本山の役もする。今立本寺の全国関連組織の理事長が何かをやらされている。

講演は今もうやめたが、昔はよく横浜からあっちのほうまで行った。

今でも生活クラブ生協辺りからいろいろ会報類が沢山来る。

空き缶のデポジットをやれと活動をした。条例をつくらせたが骨抜きにされた。

大手ビールメーカーS、家電メーカー、日経連との戦いだった。

その時は市長や清掃局長を抱きこんだ。その市長は革新市長で、しかし条例ができる末期に倒れて、その後の市長がでたらめだった。

その時書いた本は全国の図書館にある。(「カンカン坊主の清掃ゲリラ作戦」1984 樹心社)

僕は今でいうとNGO、当時は市民運動をしていた。

その後も古都税問題に取り組んだ。観光客から税金をとるというもので、とりたきゃとればいいが坊主が市役所のかわりに税金をとることはようせんから、市役所から門の前に立たせて税金とれといった。政教分離。江戸時代じゃあるまいし、役所の代わりをなぜ寺がせなあかんのや。

この頃からこの寺に来る人がまた増え始めた。

タクシーの運転手がひいきにしてくれた。なぜかというところは自由にはいってお賽銭箱にいれてくださいと古都税反対闘争のため、閉門戦術をとらなかったから。門前町の土産物屋などに迷惑がかかるから。

寺なのに拝観したい人が拝観できないのはおかしい。

・志縁廟について

Q:志縁廟をつくることになった経緯 独身婦人連盟、碑の会との付き合いについて

A:当時、独身婦人連盟のメンバーで構成された「女の碑の会」の会長、谷嘉代子さんとは市大の時の助手仲間。その後定年でやめるといので花園大学にひっぱった。

ほんとにしっかりした人。ぼっと遊びに来た時谷さんは独婦連にいて、その中で「女の碑の会」をつくって、その碑をどこにつくろうかと思っている時にたまたま寺に来てここにつくったらいいと思ったのだろう。観光客も多いことだし。

昭和78年、谷さんの方から女の碑を常寂光寺に置かせてほしいとの申し入れがあり、それを快諾、女坂の突き当たりが空いてるからそこへつくれと言った。

昭和79年、女の碑除幕式で集まった会員の方々から『ここで皆で眠れば・・・』と言う声を聞き、はっと思い、合祀廟をつくることを独身女性の方に教えてもらったという思いだった。

Q:日蓮宗が始めるということに意味はあるのか

A:日蓮宗であることに意味はない。

沖縄石垣島の空港建設反対運動をしに沖縄へ行った。開発の波が押し寄せる京都嵯峨野、大きなお寺の広大な墓地による環境破壊問題を危惧していた。谷さんは戦争独身者の立場から平和問題、独身であることと、女性であること二重の差別を受けることになった人権問題に取り組んでおられた。その当時志縁廟の話が上がりいい考えだと思った。

Q:全国に先駆けて新しい形のお墓をつくることになったことへの反響は 反発などは

A:マスコミで大々的に取り上げられた。

取材に来た女性ジャーナリストが碑の会に入るということもあった。

女の碑の会で合祀廟を建てるということを知ったことで、現在東京にある「もやいの碑」は建てられた。

浄土宗のお坊さんが参考にしたいと見学に来たこともあった。

これまで無縁墓などは寺へのなげこみに近いものがあったので、立派な塔を建て、合祀することは画期的なことであった。

また寺を修復し、観光客も来るようになったことで檀家にも信頼されていたため反発などはなかった。

Q:現在何人の方が合祀を希望しているか

A:約1000人。内800人が「女の碑の会」の会員。

Q:「女の碑の会」の会員以外の方で志縁廟に入りたいとの問い合わせへの対応 男性は

A:「女の碑の会」だけでは志縁廟の維持はできないので、途中から会員以外の方も入れることになった。子どものいない女性、将来お墓をつくっても無縁になりそうな人、男性も入っておられる。

最近沖縄の方からの申し込みがあり、これで北は北海道から南は沖縄までの方が入られることとなった。

Q:志縁廟に入られる方に戒名は与えられるか

A:希望する方にはつける。

しかし参りに来られる方は生前のお友達が多いのでわかりやすいように、ほとんどの方が俗名のままを希望される。

Q:他の永代供養との大きな違いは

A:亡くなられた女性の方にみじめな思いをさせないように立派なものをつくりたかった。拝観料や寄付などを資金にした。そこが大きな違いとなる。

また値段の安さもある。常寂光寺は10万円。

Q:碑の会のための特別な行事、活動について

A:法要を兼ねた総会年一回。その年に亡くなられた方の法要と懇親講演会などを行う。

Q:志縁廟に入られる方の家族からの反応は 親、兄弟

A:独身女性は子どもがないため、多くの財産を持っていることがある。

相続の問題(葬儀を取り仕切ったり、墓を立てたりすることで遺産が多く入る)で、当初は遺族がお骨を離さないということが実際におこった。しかし碑の会で、遺言をきちんとつくっておくなどの対応をしたので、今はそのような問題は起こっていない。

Q:葬儀はどのように行うか

A:寺での葬儀は希望があり、京都の人で近い方なら葬儀もやが、実際にはほとんどない。

今は葬儀社がほとんどをとりしきっているので当寺はほとんど関わらない。

Q:信仰の違いは超えることができるのか 他宗の方が入ることは可能か

A:形は日蓮宗のやりかたをとるが希望者がそれでいいならば宗教は問わない。稀にはキリスト教徒の方もいる。

納骨の方法も東京方式(骨壺安置方式但し33回忌まで)と関西方式(直接埋葬方式)があり、東京の場合は遺骨と共に灰もすべて斎場から持ち帰るため、志縁廟の横に灰を納める場所をつくり、そこに納められるようにしている。生前希望を聞き、どちらでもできるということを示す。また33回忌というのも東京方式に合わせ、希望を聞く。

Q:自殺者の合祀については

A:仏教では自殺は特に問題としていない。

・最近のお墓、宗教一般について

Q:最近のお墓事情について 墓不足、散骨、電腦墓など

A:常寂光寺周辺の墓地もどんどん増え、その環境破壊はひどいものがある。

また畳半畳ほどの一区画を300万円で売る寺もある。

散骨は、やりたい人はやればいいと思うがかえってお金がかかるという話も聞く。また犯罪との区別で危惧するところもある。

電腦墓はお墓が完全に商売になってしまっていることを感じる。(具体的にどんなものがよく知らないので)

Q:今後どのような形態の墓になっていくか

A:今は志縁廟のような合祀墓がはやりで、これからも増えていくと思う。

Q:最近の宗教離れ、無知について

A:しかたのないことだと思うが、上手な人の説法を聞くと仏教のことが理解でき、ありがたいものだとわかる。

Q:お坊さんへのなじみの薄さ、不信について

A:これは感じている。

Q:墓は生きている人、死んだ人にどのような機能を持つか

A:墓は自分のものではなくて子どものためのものである。

バーチャルなものであっても、故人とつながってほしいという残された者の思いである。

常寂光寺も、女の碑の会も、事務的なことはすべて副住職がやっておられるようで細かい数字などはなかなかわからなかった。しかし住職には今でも永代供養墓を本に載せた出版者や、他の地で永代供養墓をつくるお坊さんなどから多くの郵便が届いて、その処理に追われているようである。また住職にはインタビュー後、法要の予定が入っていたため、ゆっくり聞かせていただくことも難しかった。しかし、初めはお寺はなんか敷居が高いと思っていた私に、住職は寺の成り立ちから丁寧に話して下さった。お寺のお坊さんと話すのも自分のためにとっても必要なことだと感じた。そして、本からの知識だけでなんだかうさんくさいと思っていた永代供養という方法は、ここでは本物だと感じた。それは、住職の、志縁廟の話を持ちかけられた時、「女の方達に教えてもらった気がした。」という言葉からである。また、「亡くなった女の人達が恥ずかしくないようにどーんと立派なものを建てたかった。」との言葉どおり、インタビュー後見せていただいた『志縁廟』は、これがお墓なのか、と思えるくらい荘厳で、美しいものだった。このお寺には寄進されたもの、払い下げられたものが多い。それらを修復し、修復し使ってきたのである。この中で新しく建てた仏塔ともいえる建物の意義を十年、二十年でやめてしまえるわけがない、本当に永代続けていくのだという気持ちが現されたものである。中には俗名でのたくさんの位牌が肩をならべており、中央には立派な仏像が納められていた。この日の『志縁廟』での法要は、遺族が四人くらいのささやかなものであったが、住職含め、すべての方が『志縁廟』の中に入り、読経が行われた。このように 800 人分の法要が行われるのだとしたら、無縁になっている暇はない。

また日蓮宗は仏教の中では新しく、町衆に支えられた宗教であるということから、そのことを聞いてみたのだが、そのようなことは関係ないとの回答であった。時代の流れと今の宗教の在り方を垣間見ることができたような気がしている。

時間がなくて進めることができなかったのだが、この『志縁廟』は後何人入れるもので[1000 人]、いっぱいになったらどうするのか[最近締め切った]、遺族の方が他宗派・他宗教の法要を始めたらどのような対応をとるのか[自宅や菩提寺でされることは自由。但し志縁廟では規約通り、できません]、などについても聞いてみたかった。

なお、[]内の記載は、インタビュー後の確認をしていただいた際の上記の疑問への回答

である。

#### b. 常寂光寺

永代供養墓である『志縁廟』は、京都嵯峨常寂光寺にある。インタビュー途中にも話されたように、寺と墓、つまり檀家がどのような関係か、寺の経営はどのように成り立っているのか、なぜ永代供養墓を持つ寺院になったのかについて詳しく知ることが必要であると思い、次のような常寂光寺の歴史を追ってみることにする。これは住職の話と、会った際いただいた資料からまとめたものである。

常寂光寺は太閤秀吉の宗門統制に逆らって筋を通し、大本山本圀寺十六世の座を降りて隠栖した日禎上人が慶長元年(1596)開山。秀吉は文禄四年(1595)京都法華宗十六本山に、方広寺大仏開眼の千僧供養会出仕を命じてきた。当時の日蓮宗には、開宗当初の潔癖な不受不施義や折伏諫暁精神がまだ機能していたため、宗門の意見は二分してしまった。

伝統的な宗制を守り出仕しないことで、京都町衆を中心とした法華宗教勢の拡大を危険にさらしたくないというのが宗門大勢の意見だったようである。しかし妙覚寺の日奥と、これに賛同した少数の指導者達の中最後まで日奥を支えた本圀寺の日禎とは、実際翌年一月の千僧供養にも出仕せず、いずれもそれぞれ本山を出て、日奥は丹波小泉に隠れ、日禎は嵯峨小倉山に隠栖し、常寂光寺を開創した。

徳川幕藩体制の宗教統制は、すでに家康晩年の慶長、元和の頃から「寺院法度」として着手され、日蓮宗不受不施義が公に禁制化されたのは、いわゆる身池討論、つまり身延派對池上派の討論以後三十五年経った寛文五年(1665)で、この後不受不施の古制は、禁制の地下組織としてしか法脈をついでいけなくなった。

日禎が日奥を支持した頃、日禎の帰依者には、町衆以外に秀吉の身内や側近武将が多勢いた。秀吉の実姉瑞龍院日秀とその夫三好吉房、木下長嘯子とその実弟小早川秀秋、加藤清正と小出秀政等々。これらの人が、不受不施問題以降陰になり日なたになり、日禎の力になったふしがある。

慶長四年の大阪討論以後、両者は立場を異にするが、日禎が小倉山の隠栖地で五十七歳の生涯を閉じたその三年後、京町衆辻藤兵衛が、常寂光寺に多宝塔を一建立し寄進している。この大呉服商は、日奥の出自した実家であり、どうやらこの両上人の関係は性格や立場の相違にもかかわらず深い信頼でつながっていたもののようである。

上人が本山を退位したのは三十六歳の壮年期で、上人の隠栖地に小倉山を提供したのは、その頃既にこのあたり一帯を所有していた嵯峨の土倉で、上人と親交のあった角倉了以と、その岳父栄可だった。

了以はその保津川開鑿通運を慶長十一年に完成した。それに先立ち上人は、その本圀寺在任中に再興された備前伊部の妙国寺に赴き、同寺の大檀那で瀬戸内水軍の旗頭来住一族に依頼、その配下の船大工、船頭衆を呼び寄せ、了以の構想実現を助けた。実際には当初、

約二十名の船大工、船頭衆が開河期の八月当地に来て寺に止宿、了以の指揮下、備前吉井川とその河口沿岸で運行していて後に京都高瀬舟の原型となった平底舟をこの地で造り、その行船術を丹波保津川沿岸から嵐山に至る諸村に教え、梅雨前には帰国するという出稼ぎの形で協力していたようである。しかしやがて、妙国寺末寺の檀家を挙げて当地に移住し、了以の保津川通運に参加した。

常寂光寺が一応の形を整えたのは開山の没後である。晩年及至没後のあまりに貧弱な堂舎を憂えた周囲から、上人の徳顕彰のため慌てて整えたというのが実情のようである。入寂一年前の元和二年(1616)、まず本因寺南門の仁王門がそのまま移築され、本堂については桃山城客殿の移築転用が二世日韶上人の代になって実現した。この時山門も桃山城より払い下げられている。前述の多宝塔寄進もこの頃で、これだけは払い下げ、転用ではなく、当時の町衆の経済力を示す美しい建造物である。

堂塔は、一度建立すればいつまでも存続するものではない。平地で三百年もつ寺院建築なら、山地だとその半分で解体修理しなければならないと言われている。そこでこの寺の財政基盤が、創建時より今日に至るまで、どのようになってきているのかを考えなければならない。

中世末期に成立し、徳川幕府が制度化を固めた檀家制度の下では、本山や封建領主の菩提寺以外の一般寺院では、その財政基盤は檀家数や檀家の財力如何で決まってくる。しかしこの寺の檀家は、了以の保津川通運に当たるため備前より移住した船大工、船頭衆が主流である。これに近在農家、商家など、新たに檀家となった者を加えても、その総数、百にもみたくないはずである。

この財政難を救ったのが、御開山俗縁の人脈につながる扶持米収入である。広橋家は小笠原家と婚姻関係で、御開山は小笠原秀政の叔父に当たる。大阪夏の陣で秀政、忠脩父子が戦死し、二条河原で茶毘に付された後、松本城に帰るのだが、上人はその遺灰をこの寺の後山に葬った。ただ一人戦死を免れ、終生徳川に重用された忠真も、没後はここに葬られ、小笠原家先祖三公本廟として、寺には明治維新まで三十石の扶持があたえられるようになった。

創建期から年月も経ち、堂塔の修理が廻ってくる江戸後期には、その頃より盛んとなった妙見講衆や文人墨客が、寺の新たな支え手として登場した。

こうしてささやかな山寺とはいえ、多くの歴代住職がそれぞれに苦勞して伝え残して来られたのだが、幕末禁門の変の際、この寺も始めて戦火に巻き込まれ、灰塵に帰しそうになったこともある。

明治以降は、小笠原藩からの扶持も途絶え、住職の頻繁な代替わりに、そのひどい財政的窮迫が窺える。事実、大正年間、四十二世に当たる現住職の父日憲が三十歳で晋山した時は、住職のなり手もないほど荒廃老朽化していたようである。最近の過疎地寺院同様、街の寺との兼任、宗門役職兼務のかたわら、頼母子講も組織し借入金や寄付金集めに奔走、昭和六年の宗祖六百五十年遠忌にようやく一応の改修整備を終えている。荒廃を一新して観光

名所になれば、財政基盤も改善されると期待したが、借入金の返済も終わらぬ内に、日本は十五年戦争にのめり込んで行き、昭和十七年十二月、日憲は金沢への布教中、心臓発作で他界した。

十九年には後を継いだ現住職の兄も急逝、現住職が心理学を学んだ大学を卒え、寺を継いだのは、まだ戦後の混乱期の昭和二十七年であった。それまで寺は形式上の代務住職を立てていた。

当時檀家数八十軒、身すぎのため大阪市大助手として勤め、四年後大阪市の児童相談所創設時には志願転出し、文字通りの日曜坊主となった。ところが昭和三十七年、八年頃より、常寂光寺にも待ち望んだ観光客たちが訪れ始めた。

それまでは竹筒に自発的に喜捨していただく方式で、檀家役員の懇懇をかわしていたが、三十九年、詩人・故平野威馬雄作の『京都の詩情』という随筆集がきっかけで、拝観料導入に踏み切った。

初年度の拝観収入は二十九年にとどまったが、嵯峨野ブームの波に乗り、四十三年百万円台、四十六年一千万円台と急速に伸びて行った。四十七年、住職は好機逸さず残りの人生を寺再生にかけようと決意、大阪市をやめて近くの花園大学に奉職、教壇・勸進・修復の日々が続いた。四十八年十月三十日、戦時中の資源供出で失くなった凡鐘が復元、これが常寂光寺蘇生の第一声となり、この年の大晦日から、かがり火を焚き、善哉の接待をして除夜の鐘を打つ人たちを迎えるようにもなった。

翌四十九年には、拝観収入も三千万円の大台に乗った。この年には引き続き崩壊寸前の妙見堂、本殿拝殿の改装にかかった。当時拝観収入の急成長があったとはいえ、拝観のためには境内整備をはじめ経常経費も必要で、改修工事の大半は、まだまだ伝統的な檀信徒勸進に頼らなければならなかった。この年住職は十二指腸潰瘍に倒れ、財政も軌道に乗り始めたいま、何をそんなに急ぐ必要があるのか、住職本人やその父が願った寺の再生とは、そんな外観だけのものではなかった筈だ、と気がついたそうである。

その翌年から「美しい嵯峨野をまもる会」活動に取り組み始めた。これは単なる観光協会傘下の保勝会組織にとどまらず、老人クラブも加わった「ごみから自治と福祉へ」を目指す社会運動であり、自然環境や歴史的風土を保全し、美しい嵯峨野を伝え残していくためには、まず地域に対する住民の愛情と自治意識を育てなければという、ラジカルな発想から出発している。

古都税条例が強行実施された三年間、及びその廃止後の一年七ヶ月間、常寂光寺では絶好の機会とばかり役員方を説得し、ヨーロッパの古い協会で行われているような志納金方式、及び米国の一部公園が実施して成功しているという、財政公開、目安額呈示の出口志納金方式を、それぞれ試験的に実施した。しかし結果は残念ながら、日本では未だどちらも難しいということを知らされて終わった。

しかし拝観料方式でも、一種の合理的、低額の寄付金というその遣い方に配慮すれば、筋を通すことは可能で、墮落は避けられる。宗教法人は同時に公益法人でもあり、寄付金

の支出面で単に自己の施設・事業維持だけでなく、もっと公益的な事業へのチャレンジ、そのための支出も確保すべきである。

嵯峨野の寺院方の呼びかけで始められた「美しい嵯峨野をまもる会」は、実はこの問題意識が出発点となっている。この運動を進める中で、広い力動的な視点に立ってバランス感覚を説くエコロジーと、仏教的縁起思想との類似に気付き、環境問題こそもっとも現代に適った布教の途だということを確認するようになった。

大阪市大の助手仲間だった谷嘉代子先生から、女の碑や合祀廟建設の相談を受けたのもこの頃である。

1979(昭和五十四)年、常寂光寺境内に、平和を希い、独身女性の社会的人権を訴える記念碑が建立された。これを機縁に、死後の自立も生前に準備し、安心して熟年期を送るための合祀墓建立計画が、寺と『女の碑の会』との間で進められた。この計画はその後マス・メディアを介して大きな社会的反響を呼び、その結果、個人の生き方や人間関係の多様化により従来の「家の墓」になじまない人が、独身女性の他にも意外と多いことが判明した。そこで計画はこれらの人々も、受け入れるよう改められ、ただしここでも「志縁」の墓をとという趣旨は、そのまま残すことが確認された。

こうして『志縁廟』は『女の碑』建立十一年目の1990(平成二)年春彼岸に完成した。

このように一つのお寺の歴史を追っていくだけでも寺院が抱える様々な問題を見ることが出来る。まず最大の問題は経営の難しさである。常寂光寺は現在紅葉などのスポットとしてインターネットなどに紹介される観光地として有名で、借金から始まり、観光客からの拝観料が資金となり、寺をきれいに手入れし、人が見て楽しめる寺院にすることで拝観者数を増やしてきた。しかし、拝観料を望めない寺はどうするのか。当然墓をたくさん作り、檀家を増やして高い布施をとり、寺を経営していくのだろう。常寂光寺住職へのインタビューにも出てくるが、寺が手っ取り早く儲けることができるのは墓を売ることである。駅から常寂光寺に続く道の途中にも美しい竹林の間から、京都でも有名な寺院の広大な墓地が広がっているのが見えた。格式ある、大きなお寺はその維持費にもお金がかかり、お布施なども高いことが容易に想像できる。このような寺院の影響により、寺の坊主は信用できない、金をまきあげるだけまきあげて人の死を食い物にしているなどと言われる。そして、人々のお寺離れが進行しているのだ。常寂光寺はこのような危険から逃れることができたのである。

またこの住職はある意味特殊である。京都の空き缶条例を制定するために市民運動をし、その本も出している有名人でもあるようだ。寺の子供として生まれたが次男であったため住職になる気はさらさらなく、大学へ行き、働いていた。えらそうな言い方になるかもしれないがそこで世の中がどのような方向に向かっていて、これから何が望まれるのかを感じる感性を得たのだろう。よく、裁判官が勉強だけをしてきて世の中の現実をあまり知らないことが指摘されるが、人々を導く立場である宗教人にも同じことが言えるのでは

ないだろうか。父親が懸命に立て直した寺を守るため、住職になり、維持してきた。環境問題について取り組み、ちょうどその頃、働いていたからこそ知り合いであった谷嘉代子さんから『女の碑』についての相談をうける。『志縁廟』はこの住職だったからこそ常寂光寺に建ったといえそうである。

また日蓮宗の伝統的古制である不受不施を貫いて隠栖したのがきっかけで開山されたこのお寺で、宗教・宗派を問わず、自立と共生を尊び、平和を希い、死後もこの願いを伝えてゆこうとする全ての人々を受け入れる墓が建てられたのも大変興味深いことであった。

### c . 女の碑の会

会員へのインタビューが不可能であったため、常寂光寺の住職からいただいた資料と、谷代表が書かれた本(参考文献5)をもとに『女の碑の会』について知る。

永代供養墓がつくられるもととなった共同体はいったいどのようなものであったのか。なぜこのような墓が必要であったのか。墓は彼女らにとってどのような存在であったのか、『女の碑の会』の活動を追うことでそれらが明らかになればと思う。

### 女ひとり生き ここに 平和を希う

女の碑はもともと独身婦人連盟のメンバーが中心になってつくったものである。戦争独身者のモニュメントとして反戦の意味を表す碑であった〔注1〕。それを常寂光寺が土地を提供することで関わったのである。独身婦人連盟の事業として進めるのが手短でわかりやすいが、理事会からいい返事をもらうことができず、別組織として道を歩んだ。ことが進むうちに納骨もお願いしたいという話になり、納骨堂としての『志縁廟』がつくられることとなった。年一回「女の碑の会」ニュースが発行され、年の終わりには会員が常寂光寺に集まりその年なくなった人のための追悼・法要が行われている。死後の面倒は自分で見るということの難しさを会員同士で学び合い、遺言をきちんと残すことなどが決められた。また生きているもの同士でも様々な助け合いがあり、なよたけ基金によるお見舞いはその一例である。また死者と生きる者をつなぐ志縁便ネットワークでは、会員が亡くなったとき、生きている会員が自宅から常寂光寺へと遺骨を運び、納骨するというものである。もともと戦争独身者のための会であったが、現在では年齢に関係なく、独りの女性なら入会できる。また『志縁廟』のほうは、会の方針に賛成できる人、日蓮宗の葬送で納骨できる人なら誰でも入れることになっている。会の簡素化により事務局は常寂光寺に引き継がれ、副住職がその役割を担っている。

以上がおおまかな歩みである。年号などについては以下に詳しい。

[注1]: 戦争独身者とは、第二次世界大戦時、2百万人にのぼる若者が戦場で生命を失った陰で、それらの若者たちと結ばれるはずであった女性達のことである。女性のひとりだちには困難の多い当時の社会にあって、これらの女性達は懸命に生き、

その数は50万人余いたともいわれている。

197847 常寂光寺で、長尾憲彰師と谷代表との間で、個人墓を同寺につくってもらいたいという話ができた。48 その話が、独身婦人連盟関西支部・委員会でふくらみその後、例会で独身女性の記念碑をつくる準備委員会が発足。729 常寂光寺で記念碑準備委員を中心とした話し合いがあり、碑を置く場所が決まる。1979121 常寂光寺の紹介をえて、京都・石寅 KK の案内で碑の石の購入に大阪・能勢に準備委員四名が行く。217 碑の揮毫を依頼していた市川房江さんの来阪をきき、会場にご挨拶に行く。碑の裏面の趣意文の揮毫は長尾住職にご承諾いただく。3 会員へのアンケートをもとに委員会で碑文「女ひとり生きここに平和を希う」を決定。会名を「女の碑の会」とし、独身婦人連盟とは別組織となる。4 一般からの寄付金をおねがいする文書を作成。53 女の碑の会ニュース創刊号発行(手書き)88 読売新聞・戦争展に市川房江さんの「女ひとり生きここに平和を希う」の書を出展。9 市川房江さんの署名入りの書は額に表装し、常寂光寺に寄贈した。129 女の碑除幕式(当日までの会員数 99 名)1980127 女の碑の会のつどい第二回(当日までの会員数 130 名)松田芳子さんの法要・追悼会。1981211 市川房江さん逝去される。126 女の碑の会のつどい第三回(当日までの会員数 150 名)市川ミサオさんを迎えて市川房江さんの追悼をする。ご遺族の了解をえて、房江さんを女の碑の会名誉会員に。1982125 女の碑の会のつどい第四回(当日までの会員数 165 名)鈴木良子さんの法要・追悼をする。1220「女ひとり生きる」谷嘉代子編がミネルヴァ書房から発行。1983121「女ひとり生きる」の印税でイラストマップ「女の嵯峨野」を出版する。124 女の碑の会のつどい第五回(当日までの会員数 187 名)1984129 女の碑の会のつどい第六回(当日までの会員数 212 名)五周年記念講演会「団塊の世代から見た戦争独身」講師は朝日新聞川名紀美記者。会の運動の中で知りあった団塊の世代の女性七、八人も会に招待し、交流をはかった。1985121 女の碑の会のつどい第七回(当日までの会員数 217 名)「私の戦後四十年」の会員講和 1986127 女の碑の会のつどい第八回(当日までの会員数 256 名)武田圭史氏作曲「碑の曲」を女性コーラスが碑に奉納。「女ひとりの四十年」(募集原稿)を本で発行。1987126 女の碑の会のつどい第九回(当日までの会員数 279 名)法要・追悼 会員講和 1988315 故山内郁子さんを偲ぶ会が東京で、納骨堂への募金よびかけ。320 常寂光寺からの要望で、常寂光寺役員会に会の代表者が出席。檀家総代はじめ役員に御礼をのべ、役員会では会代表者を役員として承認された。124 つどい第十回(当日までの会員数 305 名)法要・追悼 19891115 つどい第十一回(当日までの会員数 359 名)納骨堂(志縁廟)建立祝賀法要を施行。祝賀には小山内美江子さん、瀬戸内寂聴さん、井上治代さんを招く。1990321 志縁廟落慶法要。825 お墓シンポジウム(新潟)に女の碑の会も参加。122 つどい第十二回(当日までの会員数 506 名)法要・追悼 納骨堂建立にともない碑の会会則改正。1991330 会員の寄付金による「志縁便」が誕生、志縁便委員会発足。昨年豊島千代さんからの寄付金で志縁廟の扁額ができた常寂光寺から連絡。121 つどい第十三回(当日までの会員数 550 名)法要・追悼 199218 生と死を考える会シンポジウム「高齢化社会におけるむらい」に参加。530 田辺聖子さんから小説「おかあさん疲れたよ」の終了にあたって会へ寄付。711 田辺さんの寄付金は「田辺聖子・なよたけ基金」として委員会発足。126 つどい第十四回(当日までの会員数 590 名)法要・追悼 1993125 つどい第十五回(当日までの会員数 638 名)法要・追悼 1994124 つどい第十六回(当日までの会員数 670 名)法要・追悼 志縁廟に奉納される観音像の開眼御供養 1995117 関西に大地震。この日から会員の安否確認に入る。結局一名死亡、九名家屋崩壊とわかる。112「エイボン女性年度賞・功績賞」を会の代表・谷が受ける。123 つどい第十七回(当日までの会員数 697 名)法要・追悼 会員の大震災体験発表 199671 女の碑の会ニュース No.18 合同委員会報告より会員数 720 名 121 つどい第十八回法要・追悼 1997127 つどい第十九回法要・追悼 会への Q&A 199861 女の碑の会ニュース No.19 合同委員会報告より会員数 827 名 碑の会の会員

を八百五十名までとして、それ以上の入会を締め切ること。126 つどい第二十回法要・追悼 二十周年記念講演 199961 女の碑の会ニュースNo.21 合同委員会報告より会員数 848 名 1010 つどい第二十一回法要・追悼 事務局から事務的な部分はお寺へ徐々に移行させていき、碑の会は簡素化して同窓会的運営を行うとの挨拶。20001016 つどい第二十二回法要・追悼 2001620 女の碑の会ニュースNo.23 最終号 合同委員会報告より 支援委員会の実務を(株)公益社に依頼。

女ひとりの碑 碑の会ニュース合本 (参考文献 6)より抜粋

『女の碑』が建てられたことが新聞に載り、雑誌に載り、テレビに出て、ドラマにまでなって、当時は大変な騒ぎであったようだ。『女の碑の会』は女性のお墓問題を提起した会になった。もともと反戦への平和運動と、独身であることと女性であることの二重の差別を受けてきて人権運動を行う谷さんと、墓地が引き起こす環境破壊について考えていた住職が『志縁廟』という形で一つになり、答えを導き出したようである。戦争独身者の女性達が老年期となり、墓について真剣に考え始めたとき、奇しくも世の中は独身でもばりばり働く女性が増え、子供の数は減少し、新しい墓を求める時代であった。しかしそれだけでなく、この墓が、独身で生きてきた女性達にとってどれだけの救いになったかは、「女の碑の会ニュース」に寄せられる手紙や寄稿を見ればよくわかることである。「心の灯を賜りました」「これで死後の心配はなくなり、今後、手前に向かって対策を考えればいいとスッキリしました」「これで命ある限り、安心して力いっぱい生きていけると、嬉しく思っております」これらはすべてこれから生きることへの決意であろう。死に場所を用意することで生きることに光が差している。また常寂光寺という寺との密な関係があってこそこの永代供養墓は安心の装置として働き、安心して生きられる、安心して死ぬことができるということにつながっているのだろう。墓に入る「仲間」の共同性を確認する活動とその場所があったからこそ『志縁廟』は安心の装置として機能しているのだ。

#### (5) まとめと反省

私達が行った共通調査のアンケートから「今後葬儀はどうなっていくか」という問いに対し、五割以上の 63.8%が「多様化する」との回答であった。しかし自分の葬儀について「具体的に考えてある」人はそのうち 16.1%と、「よく考えてある」と答えた人を足しても 31.7%である。このアンケート調査からは、その考えた葬儀が従来の葬儀とは違うものであるということまではわからないため、また考えている人の多くが 60 歳以上の人であるため、実際新しい自分にあった葬儀について考えている人はもっと少なくなるだろう。私はこの結果を見て、本当に多様化していくのかと疑問に思った。どうしても、「私は考えていないけどなんとなくそうになっていくでしょ」としか感じる事が出来ない。これらは葬儀に関する質問であったが、墓についても同様のことが言えるだろう。墓は生前に形にしておくことが可能なため、葬儀より少し前を歩いているだけなのだ。

現在永代供養墓は全国に 140 基以上あることがわかっている。しかしそのほとんどは「志

縁廟」や、同じ頃につくられた「安穩廟」などを模して寺や霊園側が主導でつくられたものである。これでは今までにあった納骨堂や合祀墓と何ら変わることはない。それらが無縁であることに大変革を与えた「女の碑の会」などの共同体の功績でしかないのだ。

この調査は、墓が多様化を見せたとされる「志縁廟」に焦点をあてて進められた。戦争独身者である女性達は自分の生き方に誇りを持ち、死んだ後も自分ですべて面倒をみたいと墓をつくるに至った。そのためには、常寂光寺の協力、マス・メディアを通じた世間の後押しが必要不可欠であったろう。社会には存在しなかったお墓の形態に宗教が賛同し、その流れに社会がのってきたとみることができる。彼女たちは確実に自分の納得する死を手に入れ、それを励みに残る人生を安心して過ごしたことだろう。悩みの種であった墓問題を解決し、そればかりでなく、社会に自分たちの存在を明らかにし、認めさせた。このようなことを時間がなくて実際に会って聞けなかったことは本当に残念である。またここ以外の永代供養墓と比べて「志縁廟」はどの点で優れていたのか比べることも必要なことだった。すべての事がうまく運んだように見える「志縁廟」にもまた、十年前とは違う現在とのズレが見えたかもしれない。それらを捉えてこそ「死に方の多様化」を述べることができたであろう。

#### 参考文献・資料

1. 安田 睦彦著『お墓がないと死ねませんか』岩波書店(1992)
2. 森 謙二著『墓と葬送の現在 先祖祭祀から葬送の自由へ』東京堂出版(2000)
3. 中井 博文著『だれも教えなかったお葬式の本物の値段と手順』総合法令出版(2000)
4. 長尾 憲彰著 橋本 健次著「塀のない寺」長尾 憲彰『常寂光寺』淡交社(1995)
5. 谷 嘉代子編『女ひとり生きる』ミネルヴァ書房(1983)
6. 女ひとりの碑「碑の会ニュース合本」女の碑の会委員会(2001)
7. <<http://www.osoushiki-plaza.com/institut/dw/199106.html>>最近の墓地事情
8. <<http://www.butsuji.co.jp/sousou/sousou-henka/bochiniysuiteno.html>>  
墓地についての意識
9. <<http://www.ipot.co.jp/tera>>永代供養推進協会の永代供養墓案内<

